

海神別荘

泉鏡花

青空文庫

時。

現代。

場所。

海底の琅玕殿。

人物。

公子。沖の僧都。（年老いたる海坊主）美女。博士。

女房。侍女。（七人）黒潮騎士。（多数）

森厳しんげん藍碧らんぺきなる琅玕ろうかん殿裡でんり。黒影こくえいあり。——沖そうの僧都そうず。

僧都 お腰元衆。

侍女一 (薄色の洋装したるが扉ドアより出づ) はい、はい。これは御僧おそう。

僧都 や、目覚しく、美しい、異かわつた扮装いでたちでおいでなさる。

侍女一 御挨拶ごあいさつでございます。美しいかどうかは存じませんが、異かわつた支度には違

いないのでございます。若様、かねてのお望みが叶かないまして、今夜お輿こし入いれのございま

す。若奥様が、島田のお髪ぐし、お振袖と承りましたから、私わたくしどもは、余計そのお姿のお目

立ち遊ばすように、皆して、かように申合せましたのでございます。

僧都 はあ、さてもお似合いなされたが、いずこの浦の風俗じやろうな。

侍女一 度々海の上へお出でなさいますもの、よく御存じでおあんなさいませようのに。

僧都 いや、荒海を切つて影を顕あらわすのは暴風雨の折から。如に法ほうたいてい暗夜やみじやに困つ

て、見えるのは墓の船に、死骸しがいの蠢うごめく裸体はだかばかり。色ある女に性しょうの衣きぬなどは睫毛まつげにも

掛かりませぬ。さりとも小僧のみぎりはの、蒼あおい炎の息を吹いても、素奴色しやつの白いはない

か、袖あかの紅あかいはないか、と胴まの間ま、狭間はざま、帆柱ほしらの根、錨いかりづな綱なの下までも、あなぐり探

いたものなれども、孫子は措け、僧都においては、久しく心にも掛けませいで、一向に不案内じゃ。

侍女一（笑う）お精進でおいで遊ばします。もし、これは、桜貝、蘇芳貝、いろいろの貝を蕊にして、花の波が白く咲きます、その渚を、青い山、緑の小松に包まれて、大陸の婦たちが、夏の頃、百合、桔梗、月見草、夕顔の雪の装などして、旭の光、月影に、遙に（高潤なる碧瑠璃の天井を、髪艶やかに打仰ぐ）姿を映します。ああ、風情な。美しいと視めましたものでございますから、私ども皆が、今夜はこの服装に揃えました。

僧都 一段とお見事じゃ。が、朝ほど御機嫌伺いに出ました節は、御殿、お腰元衆、いずれも不断の服装でおいでなされた。その節は、今宵、あの美女がこれへ輿入の儀はまだ極らなんだ。じたい人間は決断が遅いに因つてな。……それじゃに、かねてのお心掛か。弥疾く装が間に合うたもののおう。

侍女一 まあ、貴老は。私たちこの玉のような皆の膚は、白い尾花の穂を散らした、山々の秋の錦が水に映ると同じに、こうと思えば、ついそれなりに、思うまま、身の装の出来ます体でおりますものを。貴老はお忘れなさいましたか。

貴老は。……貴老だとして違いはしません。緋ひの法衣ころもを召そうと思えば、お思いなさいます、と右左、峯ひともとに、一本燃立つような。

僧都 まま、分つた。(腰かかを屈めつつ、圧おさうるがごとく掌たなそこを挙げて制す) 何とも相済まぬ儀じや。海の住居すまいの難ありがた有なさに馴なれて、蔭日向かげひなた、雲ゆきぎの往来うしおに、潮うしおの色の変ると同様によいしぎい如意自在に心のまま、たちどころに身の装よそおいの成る事を忘れていました。

なれども、僧都が身は、こうした墨染やみの暗夜やみこそ可よけれ、なまじ緋ころもの法衣ころもなど絡まとおうなら、ずぶ濡ぬれの提ちようちん灯とまじいじや、戸惑とまじいをしたの魚えいじやなどと申おしそう。圧おしも石も利く事ではない。(細く丈長くろがねき鉄かきの錨かきを倒かにして携つええたる杖つえを、軽かろく突直つえす。)

いや、また忘れてはならぬ。忘れぬ前さきに申まかり上げたい儀で罷まかり出た。若様へお取次を頼たのみましょ。

侍女一かしこま 畏たりました。唯ただ今いま。……あの、ちようど可い折いに存ぞんじます。

右みぎの方かた闔あを排はして行いく。

僧都 (謹ていみたる体ていにて室内みまわをす。)

はあ、争あわれぬ。法衣ころもの袖そでに春はるがそよぐ。

(錨いの杖だを抱いだきてイたむ。)

公子（衝と押す、鬨を排きて、性急に登場す。面玉のごとく藪丈けたり。黒髪を背に捌く。青地錦の直垂、黄金づくりの剣を佩く。上段、一階高き床の端に、端然として立つ。）

爺い、見えたか。

侍女五人、以前の一人を真先に、すらすらと従い出づ。いずれも洋装。第五の侍女、年最も少し。二人は床の上、公子の背後に。二人は床を下りて僧都の前に。第一の侍女はその背に立つ。

僧都 は。（大床に跪く。控えたる侍女一、件の錨の杖を預る）これはこれは、御休息の処を恐入りましたてござります。

公子（親しげに）爺い、用か。

僧都 紺青、群青、白群、朱、碧の御蔵の中より、この度の儀に就きまして、先方へお遣わしになりました、品々の類と、数々を、念のために申上げとうござりますて。

公子（立ちたるまま）おお、あの女の父親に遣つた、陸で結納とか云うものの事か。

僧都 はあ、いや、御聡明なる若様。若様にはお覚違いでござります。彼等夥間に結

納と申すは、親々が縁を結び、媒妁人の手を持ち、婚約の祝儀、目録を贈りますでござります。しかるにこの度は、先方の父親が、若様の御支配遊ばす、わたつみの財宝に望を掛け、もしこの念願の届くにおいては、眉目容色、世に類なき一人の娘を、海底へ捧げ奉る段、しかと誓いました。すなわち、彼が望みの宝をお遣しになりましたに因つて、是非に及ばず、誓言の通り、娘を波に沈めましたのでござります。されば、お送り遊ばされた数の宝は、彼等が結納と申そうより、俗に女の身代と云うものにござりますので。

公子（軽く頷く）可、何にしろすこしばかりの事を、別に知らせるには及ばんのに。

僧都 いやいや、鱗一枚、一草の空貝とは申せ、僧都が承りました上は、活達なる

若様、かような事はお気煩かしゅうおいでなさりましようなれども、老のしようがに、

お耳に入れねばなりません。お腰元衆もお執成。（五人の侍女に目遣す）平にお聞

取りを願わしゅう。

侍女三 若様、お座へ。

公子（顧みて）椅子をこちらへ。

侍女三、四、兩人して白き枝珊瑚の椅子を捧げ、床の端近に据う。大隋円形の

白き琅玕ろうかんの、沈みたる光沢を帯べる卓子テエブル、上段の中央にあり。枝のままなる見事なる珊瑚の椅子、紅白二脚、紅あかきは花のごとく、白しろきは霞のごときを、相對して置く。侍女等が捧出ささげいでて位置を変えて据えたるは、その白しろき方一脚なり。

僧都 真鯛またい大小八千枚。鰯ぶり、鮪まぐろ、ともに二万疋。鰹びき、かつお、真那鰹まながつお、おのおの、各一万本。大比目魚おおひらめ五千

枚。鱧きす、ほうぼう、こち、あいなめ、身魚あいなめ、目張魚めばる、藻魚もうお、合せて七百籠かこ。若布わかめのその幅六丈、長さ

十五尋のもの、百枚一卷九千連。鮫あんどろ、鰺あじ五十袋。虎河豚とらづぶ一頭。大の鮓たこ一たこひとつが番。さて、

別にまた、月の灘なだの桃色の枝珊瑚一株、丈八尺。(この分、手にて仕方す) 周圍まわり三抱みかかえ

の分にござりまして。ええ、月の真珠、花の真珠、雪の真珠、いずれも一寸の珠たま三十三

粒りゅう、八分の珠百五粒、紅宝玉三十顆か、大さ鶴の卵、粒を揃えて、これは碧瑪瑙あおめのうの盆に

装かざり、綠宝玉、三百顆、孔雀くじゃくの尾の渦卷うずまきの数に合せ、紫の瑠璃るりの台、五色に透いて輝

きまする鰐わにの皮三十六枚、沙金さきんの包七十袋。量目約百万兩。閩浮檀えんぶだん金十斤也。緞子どんす、

縮緬ちりめん、綾あや、にしき、牡丹ぼたん、芍薬しやくやく、菊の花、黄金色の菫こんじき、銀覆輪ぎんぶくりんの、月草、露草。

侍女一 もしもし、唯今ただいまのそれは、あの、残らず、そのお娘御むすめごの身の代しろとかにお遣わ

しの分なのでございますか。

僧都 残らず身の代と?……はあ、いかさまな。(心付く) 不重宝ぶちようほう。これはこれは海松みる

ふさの袖に記して覚えのまま、潮に乗つて、颯と読流しました。はて、何から申した事やら、品目の多い処へ、数々ゆえに。ええええ、真鯛大小八千枚。

侍女一 鱒、鮪ともに二万疋。鯉、真那鯉各一万本。

侍女二 (僧都の前にあり) 大比目魚五千枚。鱧、魴、鯛、あいなめ、目ばる、藻魚の類合せて七百籠。

侍女三 (公子の背後にあり) 若布のその幅六丈、長さ十五尋のもの百枚一卷九千連。

侍女四 (同じく公子の背後に) 鮫鱧五十袋、虎河豚一頭、大の鮪一番。まあ……

(笑う。侍女皆笑う。)

僧都 (額の汗を拭く) それそれさよう、さよう。

公子 (微笑しつつ) 笑うな、老人は真面目でいる。

侍女五 (最も少し。齊しく公子の背後に附添う。派手に美しき声す) 月の灘の桃色の枝

珊瑚樹、対の一株、丈八尺、周圍三抱の分。一寸の玉三十三粒……雪の真珠、花の真珠。

侍女一 月の真珠。

僧都 しばらく。までじゃまでじゃ、までにござる。……桃色の枝珊瑚樹、丈八尺、周圍

三抱の分までにござった。(公子に) 鶴の卵ほどの紅宝玉、孔雀の渦巻の綠宝玉、青瑪瑙の盆、紫の瑠璃の台。この分は、天なる(仰いで礼拝す) 月宮殿に貢のものにござりました。

公子 私もそうらしく思つて聞いた。僧都、それから後に言われた、その董、露草などは、金銀宝玉の類は云うまでもない、魚類ほどにも、人間が珍重しないものと聞く。が、同じく、あの方へ遣わしたもののか。

僧都 綾、錦、牡丹、芍薬、繾も散りもいたしませぬを、老人の申 条、はや、また海松のように乱れました。ええええ、その董、露草は、若様、この度の御旅行につき、白雪の竜馬にめされ、渚を掛けて浦づたい、朝夕の、茜、紫、雲の上を山の峰へお潜びにてお出ましの節、珍しくお手に入りましたを、御姉君、乙姫様へ御進物の分でござりました。

侍女一 姫様は、閻浮檀金の一輪挿に、真珠の露でお活け遊ばし、お手許をお離しなさいませぬそうにございます。

公子 度々は手に入らない。私も大方、姉上に進げたその事であろうと思つた。

僧都 御意。娘の親へ遣わしましたは、真鯛より数えまして、珊瑚一对……までに止まり

ました。

侍女二 海では何ほどの事でもございませんが、受取ります陸おかの人には、鯛も比目魚も千と万、少ない数ではございますまいに、僅わずかな日の間に、ようお手廻し、お遣わしになりましてございます。

僧都 さればその事。一国、一島、津や浦の果はてから果を一網ひとあみにもせい、人間ななかま夥間が、大海原おうなほらから取入れます獲えものというは、貝たまに溜たまつつた雫しずくほどにいささかなものでござつての、お腰元衆など思つてもみられまい、鉤はりの尖さきに虫を附けて雑魚ざぎこ一筋を釣るといふ仙せん人業んわざをしまするよ。この度の娘の父は、さまでにもなけれども、小船一つで網を打つが、海月くらげほどにしよぼりと拵しやくげて、泡にも足らぬ小魚しやくを掬くう。入いれものが小さき故に、それが希望のぞみを満みしますに、手間てまの入いること、何ともまだるい。鯛いわしを育てて鯨くじらにするより齒は痒かゆい段うの行ゆき止とまり。(公子に向う) 若様は御性急じや。早く彼ねがが願ねがいを満みたいて、誓ちかい美女を取れ、と御意ある。よつて、黒潮、赤潮の御手兵をちとばかり動どうかしましたわ。赤潮の劍つるぎは、炎の稻妻、黒潮の黒い旗は、黒雲の峰つを築ついて、沖つからと浴あびせたほども、一浦ひとつらの津波となつて、田畑も家も山へ流ながれた。片隅かどの美女の家へ、門背戸かどせどかけて、暈か天井いちしき、一齊いちしきに、屋根の上の丘の腹まで運こ込みました儀ぎでござつたよ。

侍女三 まあ、お勇ましい。

公子 (少し俯向く) 勇ましいではない。家畑を押流して、浦のもの等は迷惑をしはしないか。

僧都 いや、いや、黒潮と赤潮が、密と爪弾きしましたばかり。人命を断つほどではござりませなんだ。もつとも迷惑をせば、いたせ、娘の親が人間同士の間でさえ、自分ばかりは、思い懸けない海の幸を、黄金の山ほど掴みましたに因って、他の人々の難渋ごときはいささか気にも留めませぬに、海のお世子であらせられます若様。人間界の迷惑など、お心に掛けさせますには毛頭当りませぬ儀でございます。

公子 (頷く) そんなら可——僧都。

僧都 はは。(更めて手を支く。)

公子 あれの親は、こちらから遣わした、娘の身の代とかいうものに満足をしたであろうか。

僧都 御意、満足いたしましたればこそ、当御殿、お求めに従い、美女を沈めました儀にござります。もつとも、真鯛、鯉、真那鯉、その金銀の魚類のみでは、満足をしませなんだが、続いて、三抱え一对の枝珊瑚を、夜の渚に差置きますると、山の端出づる月の

光に、真紫に輝きまするを夢のように抱きました時、あれの父親は白砂に領伏し、波の裙すそを吸いました。あわれ竜神、一命も捧げ奉ると、御恩のほどを難有ありがたがりましたのでござります。

公子（微笑す）親仁おやじの命などは御免だな。そんな魂を引取ると、海月くらげが殖ふえて、迷惑を
するよ。

侍女五 あんな事をおつしやいます。

一同笑う。

公子 けれども僧都、そんな事で満足した、人間の慾よくは浅いものだね。

僧都 まだまだ、あれは深い方でござります。一人娘の身に代えて、海の宝を望みましたは、慾念たくまじの逞たくまい故でござります。……たかだかは人間同士、夥間なにかまうちで、白やわらかい柔あな膩あ身ぶらみを、炎の燃立つ絹に包んで蒸しながら売り渡すのが、峠の関所かと心得ます。

公子 馬鹿だな。（珊瑚の椅子をすつと立つ）恋しい女よ。望めば生命いのちでも遣やらうものを。

……はは、はは。

微笑す。

侍女四 お思われ遊ばした娘御は、天地あめつちかけて、波かけて、お仕合せでおいで遊ばしま

す。

侍女一 早くお着き遊あそば可ようございます。私わたくしどももお待ち遠まちどおに存じ上げます。

公子 道中の様子を見よう、旅の様子を見よう。（鬪ドの外に向つて呼ぶ）おいおい、居間の鏡を寄越よこせ。（鬪開く。侍女六、七、二人、赤地の錦の蔽おおいを掛けたる大なる姿見を捧げ出づ。）

僧都も御覽。

僧都 失礼ながら。（膝しつこう行して進む。侍女等、姿見を卓子テエブルの上に据え、錦の蔽ひらを展く。

侍女等、卓子の端の一方に集る。）

公子 （姿見の面おもを指し、僧都を見返る）あれだ、あれだ。あの一点の光がそれだ。お前たちも見ないか。

舞台転ず。しばし暗黒、寂せき寞ぼくとして波濤はとうの音聞ゆ。やがて一個、花白く葉の青き蓮れ華んげ燈籠とうろう、漂々として波に漾たえるがごとく踊ある。続いて花の赤き同じ燈籠、中空なかぞらのごとき高処に出づ。また出づ、やや低し。なお見ゆ、少しく高し。その数五個いっになる時、累々たる波の舞台を露あらす。美女。毛卷島田けまきしまだに結う。白の振袖、綾あやの帯、紅くれないの長襦ながじゆばん袴はかま、胸に水晶の数珠じゆずをかけ、襟に両袖を占めて、波の上に、雪のごとき竜馬りゆうめに

乗せらる。およそ手綱の丈を隔てて、一人下髪さげがみの女房。旅扮装たびいでたち。素足すそ、小桂こうちぎに棲端つま折りて、片手に市女笠いちめがさを携え、片手に蓮華燈籠れんげとうろうを提ぐ。第一点ともしびの燈の影はこれなり。黒潮騎士こくちようきし、美女の白竜馬をひしひしと囲んで両側二列を造る。およそ十人。皆崑崙奴くろんぼの形相。手に手に、すすくと槍やりを立つ。穂先ほのさき白く晁々きらきらとして、氷柱つらぎ倒かに黒髪を縫う。あるものは燈籠を槍に結ぶ、灯の高ともしびきはこれなり。あるものは手にし、あるものは腰にす。

女房 貴女あなた、お草臥くたびれでございましょう。一息、お休息やすみなさいますか。

美女 (夢見るようにその瞳を睜みひらく) ああ、(歎息とがたます) もし、誰方どなたですか。……私の身体からだは足を空に、(馬の背に裳もすそを搔かいし) 倒さかさまに落ちて落ちて、波に沈んでいるのでしょいか。女房 いいえ、お美しいお髪くし一筋、風にも波にもお纏もつれはなさいません。何でお身体からだが倒かなど、そんな事がございましょう。

美女 いつか、いつですか、昨夜ゆうべか、今夜か、前さきの世ですか。私が一人、楫かじも櫓ろもない、舟ふねに、筵むしろに乗せられて、波に流されました時、父親の約束で、海の中へ捕とらわれて行く、私へ供養のためだと云って、船の左右へ、前後あとさきに、波のまにまに散ちって浮く……蓮華

燈籠が流れました。

女房 水に目のお馴なれなさいません、貴女には道なしるべ、また土産にもと存じまして、これれが、（手に翳かざす）その燈籠でございます。

美女 まあ、灯あかりも消えずに……

女房 燃えた火の消えますのは、油の尽きる、風の吹く、風おの吹く、陸おかばかりの事でございます。一度、この国へ受取りますと、ここには風が吹きません。ただ花の香の、ほんのりと通うばかりでございます。紙の細工も珠たまに替かつて、葉の青いのは、翡翠ひすいの琅玕ろうかん、花片はなびらの紅白まは、真玉まだま、白珠しらたま、紅宝玉。燃ゆる灯ひも、またたきながら消えない星でございます。御覽遊ごらんばせ、貴女。お召ものが濡ぬれましたか。お髪ぐしも乱れはしますまい。何で、お身体からだが倒たふでございませう。

美女 最後ひとめに一目ふるさと、故郷の浦の近い峰に、月を見たと思おもいました。それぎり、底へ引くように船が沈しんで、私は波に落ちたのです。ただ幻まぼろしに、その燈籠あおの様な蒼あおい影かげを見て、胸むねを離はなれて遠くへ行ゆく、自分の身の魂たまか、導まく鬼火かと思おもいましたが、ふと見ますと、前途ゆくてにも、あれあれ、遥はるかの下かと思おもう処ところに、月が一輪、おなじ光で見えますもの。

女房 ああ、（望のぞむ）あの光は。いえ。月影ではございません。

美女 でも、貴方あなた、雲が見えます、雪のような、空が見えます、瑠璃色るりいろの。そして、真まっし白しろな絹糸のような光が射さします。

女房 その雲は波、空は水。一輪の月と見えますのは、これから貴女がお出遊いでばす、海の御殿でございます。あれへ、お迎え申すのです。

美女 そして。参って、私の身体からだは、どうなるのでございましょうねえ。

女房 ほほほ、(笑う) 何事も申しますまい。ただお嬉しい事なのです。おめでどう存じます。

美女 あの、捨小舟すておぶねに流されて、海の贄にえに取られて行く、あの、(みまわす)これが、嬉しい事なのでしようか。めでたい事なのでしようかねえ。

女房 (再び笑う) お国ではいかがでございましょうか。私たちが故郷ふるさとでは、もうこの上ない嬉しい、めでたい事なのでございますもの。

美女 あすこまで、道程みちのりは？

女房 お国でたとえは煩むずかしい。……おお、五十三次と承ります、東海道を十度とたびずつ、三百度、往還ゆきかえりを繰返して、三千度いたしますほどでございましょう。

美女 ええ、そんなに。

女房 めした竜馬は風よりも早し、お道筋は黄金こがねの欄干、白銀の波のお廊下、ただ花の香りの中を、やがてお着きなさいます。

美女 潮風、磯いその香、海松みる、海藻かじめの、咽喉のどを刺す硫黄いおうの臭気においと思いのほか、ほんに、清すずしい、佳いい薫かおり、(柔やわらかに袖を動かす)……ですが、時々、悚然ぞつとする、腥なまぐさい香のしますのは？

……

女房 人間の魂が、貴女を慕うのでございます。海月くらげが寄るのでございます。

美女 人の魂が、海月と云つて？

女房 海に参ります醜い人間の魂は、皆みんな、海月になって、ふわふわさまようて歩ある行きますのでございます。

黒潮騎士 (口々に)——煩うるさい。しっしっ。——(と、ものなき竜馬の周囲を呵かす。)

美女 まあ、情なさけない、お恥はずかしい。(袖をもつて面を蔽おほう。)

女房 いえ、貴女は、あの御殿の若様の、新夫人にいおくさまでいらつしやいます、もはや人間ではありません。

美女 ええ。(袖を落す。)——舞台転まわず。真暗まつくらになる。——

女房 (声のみして)急ぎましよう。美しい方を見ると、黒鱈くろわに、赤鮫あかさめが襲あいます。騎

馬が前後を守護しました。お憂慮はありませんが、いき参ると、斬合の攻合、修羅の巷をお目に懸けねばなりません。——騎馬の方々、急いで下さい。

燈籠一つ行き、続いて一つ行く。漂蕩する趣して、高く低く奥の方深く行く。

舞台燦然として明るし、前の琅玕殿颯る。

公子、椅子の位置を卓子に正しく直して掛けて、姿見の傍にあり。向つて右の上座。左の方に赤き枝珊瑚の椅子、人なくしてただ据えらる。その椅子を斜に下りて、沖の僧都、この度は腰掛けてあり。黒き珊瑚、小形なる椅子を用いる。おなじ小形の椅子に、向つて正面に一人、ほぼ唐代の儒の服装したる、髯黒き一人あり。博士なり。侍女七人、花のごとくその間を装い立つ。

公子 博士、お呼立をしました。

博士 (敬礼す。)

公子 これを御覧なさい。(姿見の面を示す。)

千仞の岨を累ねた、漆のような波の間を、幽に蒼い灯に照らされて、白馬の背に手綱したは、この度迎え取るおもいものなんです。陸に獅子、虎の狙うと同一に、入道鰐、坊主鮫の類が、美女と見れば、途中に襲撃つて、黒髪を吸い、白き乳を裂

き、美しい血を呑もうとするから、守備のために旅行さきで、手にあり合せただけ、少数の黒潮騎士を附添わせた。渠等は白刃を揃えている。

博士 至極のお計いに心得まするが。

公子 とところが、敵に備うるここの守備を出払わしたから不用心じゃ、危険であろう、と僧都が言われる。……それは恐れん、私が居れば仔細ない。けれども、また、僧都の言われるには、白衣に緋の襲した女子を馬に乗せて、黒髪を槍尖で縫つたのは、かの国で引廻しとか称えた罪人の姿に似ている、私の手許に迎入るるものを、不祥じゃ、忌わしいと言うのです。

事実不祥なれば、途中の保護は他にいくらも手段があります。それは構わないが、私はいささかも不祥と思わん、忌わしいと思わない。

これを見ないか。私の領分に入った女の顔は、白い玉が月の光に包まれたと同一に、いよいよ清い。眉は美しく、瞳は澄み、唇の紅は冴えて、いささかも曇れない。憂えておらん。清らかな衣を着、新に梳つて、花に露の点滴る装して、馬に騎した姿は、かの国の花野の丈を、錦の山の懐に抽く……步行より、車より、駕籠に乗ったより、一層鮮麗なものだと思ふ。その上、選抜した慥、悍な黒潮騎士の精銳等に、長槍をもつて

四辺あたりを払わせて通るのです。得意思あつちうべしではないのですか。

僧都 (しきりつむり)
頻しきりつむりに頭を傾く。)

公子 引廻しと聞けば、恥を見せるのでしよう、苦痛を与えるのであろう。槍で囲み、旗を立て、淡く清く装った得意の人を馬に乗せて市いちを練つて、やがて刑場に送つて殺した処で、——殺されるものは平凡やまいに疾病で死するより愉快でしょう。——それが何の刑罰になるのですか。陸と海と、国が違い、人情が違つても、まさか、そんな刑罰はあるまいと想う。僧都は、うろ覚えながら確たしかに記憶に残ると言われる。……貴下あなたをお呼立した次第です。ちよつとお験しらすべを願いましようか。

博士 仰聞おおせきけの記憶は私わたくしにもありません。しかし、念のために験しらすべまするで。ええ、陸上一切の刑法の記録でありましようか、それとも。

公子 面倒です、あとはどうでも可いい。ただ女子おんなを馬に乗せ、槍を立てて引廻したという、そんな事があつたかという、それだけです。

博士 正史でなく、小説、浄瑠璃じよらりの中を見ましようで。時の人情と風俗とは、史書よりもむしろこの方が適当でありますので。(金光燦爛さんらんたる洋綴やうとじの書ひらを展ひらく。)

公子 (テエブル) 卓子テエブルに腰を掛く) たいそう氣の利いた書物ですな。

博士 これは、仏国の大帝 ナポレオン 奈翁が、西暦千八百八年、スペイン 西班牙遠征の途に上りました時、かねて世界有数の読書家。必要によつて当時の図書館長バルビルに命じて製つくらせた、はこ函入新装の、一千巻、ひとたな一架の内容は、宗教四十巻、叙事詩四十巻、戯曲四十巻、その他の詩篇六十巻。歴史六十巻、小説百巻、と申しまするデュオデシモ形がたと申す有名な版本の事を……お聞及びなさいまして、御姉君おあねぎみ、乙姫様が御工夫を遊ばしました。蓮はすの糸、一筋を、およそ枚数千頁に薄く織ひ拵おけて、一万枚がひとおり一折、一百二十折を合せて一冊に綴とじましたものでありまして、この国の微妙なる光に展ひらきますると、森羅しんらばんしよ万象、人類をはじめ、動植物、鉱物、一切の元素が、ひとつ一々ずつ微細なる活字となつて、しかも、各々おのおの五色の輝かがやきを放ち、名詞、代名詞、動詞、助動詞、主客、句読くとう、いづれも個々別々、七彩に照つて、かく開きました真まつしろ白ペエジな枚の上へ、自然と、染め出さるるのであります。

公子 姉あねうえ上あが、それを。——さぞ、御秘蔵のものでしょう。

博士 御秘蔵ながら、若様の御書物蔵へも、整然ちやんと姫様がお備えつけでありますので。

公子 では、私の所有ですか。

博士 若様はこの冊子と同じものを、瑪瑙めのうに青貝あまぎの蒔絵まきえの書棚、五百架たな、御所有でいらせ

られまする次第であります。

公子 姉があつて幸福しあわせです。どれ、（取つて披くひら）これは……ただ白紙だね。

博士 は、恐れながら、それぞれの予備の知識がありませんでは、自然のその色彩ある活字は、ペエジの上には写り兼ねるのでございます。

公子 恥入るね。

博士 いやいや、若様は御勇武でいらせられます。入道にゆうどう鰐わに、黒鮫くろざめの襲かいまする節は、

御訓練の黒潮、赤潮騎士、御手の剣つるぎでのうては御退けになりまする次第には参らぬのであります。けれども、姉姫様の御心づくし、節々は御閲読ごえつどくの儀をお勧め申まするので。

僧都 もろともに、お勧め申上げますでござります。

公子 （頷くうなず）まあ、今の引廻しの事を見て下さい。

博士 確たしかに。（書を披く）手近に浄瑠璃にありました。ああ、これにあります。……若様、

これは大日本浪華なにかわの町人、大経師だいきよし以春いしゆんの年若き女房、名だたる美女のおさん。手代てだい茂右衛門もえもんと不義頭あらかわれ、すなわち引廻し礫はりつけになりまする処を、記したのであります。

公子 お読み。

博士（朗読す）——紅蓮ぐれんの井戸堀、焦熱しょうねつの、地獄のかま塗ぬりよしなやと、急がぬ道を

いつのまに、越ゆる我身の死出の山、死出の田長たおさの田がりよし、野辺のべより先を見渡せば、
過ぎし冬至とうじの冬枯この、木の間ま木の間まにちらちらと、ぬき身の槍やりの恐しや、——

公子（姿見を覗のぞきつつ、且つ聴きつつ）ああ、いくらか似ている。

博士——また冷返ひえかえ返る夕嵐、雪の松原、この世から、かかる苦患くげんにおう亡日もうにち、島田乱
れてはらはらはら、顔にはいつもはんげしよう、縛られし手の冷たさは、我身一つの寒
の入いり、涙ぞ指の爪とりよし、袖に氷を結びけり。……

侍女等、傾聴す。

公子 ただ、いい姿です、美しい形です。世間はそれでその女の罪を責めたと思うのだろ
うか。

博士 まず、ト見えまするので。

僧都 さようでございます。

公子 馬に騎のった女は、殺されても恋が叶かない、思いが届いて、さぞ本望であろうがね。

僧都 ——袖に氷を結びけり。涙などと、歎き悲しんだようにござります。

公子 それは、その引廻しを見る、見物の心ではないのか。私には分らん。（頭かぶりを掉ふる。）

博士——まだ他に例があるのですか。

博士（朗読す）……世の哀とぞなりにける。今日は神田のくずれ橋に恥をさらし、または四谷、芝、浅草、日本橋に人こぞりて、見るに惜まぬはなし。これを思うに、かりにも人は悪き事をせまじきものなり。天これを許したまわぬなり。……

公子（眉を顰む。——侍女等齊しく不審の面色す。）

博士……この女思込みし事なれば、身の寔る事なくて、毎日ありし昔のごとく、黒髪を結わせて美わしき風情。……

公子（色解く。侍女等、眉をひらく。）

博士 中略をいたします。……聞く人一しおいたわしく、その姿を見おくりけるに、限ある命のうち、入相の鐘つくころ、品かわりたる道芝の辺にして、その身は憂き煙となりぬ。人皆いずれの道にも煙はのがれず、殊に不便はこれにぞありける。——これで、鈴ヶ森で火刑に処せられまするまでを、確か江戸中棄札に槍を立てて引廻した筈と心得まするので。

公子 分りました。それはお七という娘でしょう。私は大すきな女なんです。御覧なさい。どこに当人が歎き悲みなぞしたのですか。人に惜まれ可哀がられて、女それ自身は大満

足で、自若^{じじやく}として火に焼かれた。得意想うべしではないのですか。なぜそれが刑罰な
 んだね。もし刑罰とすれば、恵^{めぐみ}の杖^{もとなさけ}、情^{むち}の鞭^だだ。実際その罪を罰しようとするには、そ
 のまま無事に置いて、平凡^{ぐずぐず}に愚^{いきな}図^な愚^なに生^{いき}存^ならえさせて、皺^{しわ}だらけの婆^{ばば}にして、その
 娘を終らせるが可^いいと、私は思う。……分けて、現在、殊にそのお七のごときは、姉上
 が海へお引取りになつた。刑場の鈴ヶ森は自然海に近かつた。姉上は御覧になつた。鉄
 の鎖は手足を繋^{つな}いだ、燃^も草^{えぐさ}は夕霜を置残してその肩を包んだ。煙は雪の振袖をふすべ
 た。炎^ひは緋^ひ鹿^{かのこ}子を燃^もえ抜^ぬいた。緋^ひの牡^{ぼたん}丹^{たん}が崩れるより、虹^{にじ}が燃^もえるより美しかつた。恋
 の火の白熱は、凝^こつて白^{はく}玉^{ぎよく}となる、その膚^{はだ}を、氷^こつた雛^{ひな}芥^{けい}子の花に包んだ。姉の手
 の甘露が沖を曇らして注いだのだつた。そのまま海の底へお引取りになつて、現に、姉
 上の宮殿に、今も十七で、紅^{くれな}の珊瑚^いの中に、結^ゆ綿^{わた}の花を咲かせているのではないか。
 男は死ななかつた。存^な命^{ながら}えて坊主になつて老い朽ちた。娘のために、姉上はそれさえお
 引取りになつた。けれども、その魂は、途中で牡^{おす}の海^{くらげ}月^{づき}になつた。——時々未練に娘を
 覗^{のぞ}いて、赤潮に追払われて、醜^{みにく}く、ふらふらと生^{なま}白^{しろ}く漾^{ただ}うて失^うする。あわれなものだ。
 娘は幸^{しあ}福^{わせ}ではないのですか。火も水も、火は虹となり、水は滝となつて、彼の生命を
 飾つたのです。拔^ぬ身^{きみ}の槍^{やり}の刑罰が馬の左右に、その誉^{ほまれ}を輝^ほかすと同一^{おんなじ}に。——博士いか

がですか、僧都。

博士　しかし、しかし若様、私は慎重にお答えをいたします。身はこの職にありながら、事実、人間界の心も情も、まだいささかも分らぬのでありまして。若様、唯今の仰せは、それは、すべて海の中にのみ留まりまするが。

公子　（穏和に頷く）姉上も、以前お分りにならぬと言われた。その上、貴下がお分りにならなければこれは誰にも分らないのです。私にも分らない。しかし事情も違う。彼を迎える、道中のこの（また姿見を指す）馬上の姿は、別に不祥ではあるまいと思う。

僧都　唯今、仰せ聞けられ承りまする内に、条理は弁えず、僧都にも分らぬことのみではござりますが、ただ、黒潮の拔身で囲みました段は、別に忌わしい事ではござりませぬように、老人にも、その合点参りましてござります。

公子　可、しかし僧都、ここに蓮華燈籠の意味も分った。が、一つ見馴れないものが見えるぞ。女が、黒髪と、あの雪の襟との間に——胸に珠を掛けた、あれは何かね。

僧都　はあ。（卓子に伸上る）はは、いかさま、いや、若様。あれは水晶の数珠にございます。海に沈みまする覚悟につき、冥土に参る心得のため、檀那寺の和尚が授けましたのでござります。

公子 冥土とは?……それこそ不埒だ。そして仇光りがする、あれは……水晶か。

博士 水晶とは申す条、近頃は専ら硝子を用いますので。

公子 (一笑す) 私の恋人ともあるうものが、無ければ可い。が、硝子とは何事ですか。

金剛石、また真珠の揃うたのが可い。……博士、贈つてしかるべき頸飾をお検べ下

さい。

博士 畏りました。

公子 そして指環の珠の色も怪しい、お前たちどう見たか。

侍女一 近頃は、かんでらの灯の露店に、紅宝玉、綠宝玉と申して、貝を鬻ぐと承り

ます。

公子 お前たちの化粧の泡が、波に流れて渚に散った、あの貝が宝石か。

侍女二 錦欄の服を着けて、青い頭巾を被りました、立派な玉商人の売りますものも、

擬が多いそうにございます。

公子 博士、ついでに指環を贈ろう。僧都、すぐに外向うて、遠路であるが、途中、早速、

硝子とその擬い珠を取棄てさして下さい。お老寄に、御苦勞ながら。

僧都 (苦笑す) 若様には、新夫人の、まだ、海にお馴れなならず、御到着の遅いばかり

り気になされて、老人が、ここに形を消せば、瞬く間ものう、お姿見の中の御馬の前に映りまする神通しんずうを、お忘れなされて、老寄に苦勞などと、心外な御意を蒙りまするわ。

公子 ははは、（無邪気に笑う）失礼をしました。

博士、僧都、一揖いちゆうして廻廊より退場す。侍女等慇懃いんぎんに見送る。

少し窮屈であつたげな。

侍女等親しげに皆その前後に齊眉かしずき寄る。

性急な私だ。——女を待つ間の心遣こころやりにしたい。誰か、あの国の歌を知っておらんか。

侍女三 存じております。浪花津ななわづに咲くやこの花冬籠ふゆごもり、今を春へと咲くやこの花。

侍女四 若様わたくし、私も存じております。浅香山を。

公子 いや、そんなのではない。（博士がおきたる書を披ひらきつつ）女の国の東海道、道中

の唄だ。何とか云うのだった。この書はいくらか覚えがないと、文字が見えないのだそ
うだ。（呟つぶやく）姉上は貴重な、しかし、少しあてっこすりの書をお拵こしらえになったよ。あ

あ、何とか云つた、東海道の。

侍女五 五十三次のごさいますよう、私わたくしが少し存じております。

公子 歌うてみないか。

侍女五 はい。(朗かに優しくあわれに唄う。)

都路は五十路あまりの三つの宿、……

公子 おお、それだ、字書のように、江戸紫で、都路と標目が出た。(展く)あとを。

侍女五 ……時得て咲くや江戸の花、浪静なる品川や、やがて越来る川崎の、軒端ならぶ
 る神奈川は、早や程ヶ谷に程もなく、暮れて戸塚に宿るらむ。紫匂う藤沢の、野面に続
 く平塚も、もとのあわれは大磯か。蛙鳴くなる小田原は。……(極悪げに)……
 もうあとは忘れしました。

公子 可、ここに緑の活字が、白い雲の枚に出た。——箱根を越えて伊豆の海、三島の里
 の神垣や——さあ、忘れた所は教えてやろう。この歌で、五十三次の宿を覚えて、お前
 たち、あの道中双六というものを遊んでみないか。上りは京都だ。姉の御殿に近い。
 誰か一人上って、双六の済む時分、ちようど、この女は(姿見を見つつ)着くであろう。
 一番上りのものには、瑪瑙の莢に、紅宝玉の実を装った、あの造りものの吉祥果を遣
 る。絵は直ぐに間に合ぬ。この室を五十三に割って双六の目に合せて、一人ずつ身体を
 進めるが可からう。……賽が要る、持つて来い。

(侍女六七、うつむいてともに微笑す)——どうした。

侍女六 姿見をお取寄せ遊ばしました時。

侍女七 二人して盤の双六をしておりましたので、賽は持つておりますのでございます。公子 おもしろい。向うの廻廊の端へ集まれ。そして順になつて始めるが可い。

侍女七 床へ振りましようでございませうか。

公子 心あつて招かないのに来た、賽にも魂がある、寄越せ。(受取る) 卓子テエブルの上へ私が投げよう。お前たち一から七まで、目に従うて順に動くが可い。さあ、集れ。

(侍女七人、いそいそと、続いて廻廊のはずれに集り、貴女あなたは一。私は二。こう口々に樂しげに取定め、勇みて賽を待つ。)

可いか、(片手に書を持ち、片手に賽を投ぐ) —— 一は三、かな川へ。(侍女一人進む)
二は一、品川まで。(侍女一人また進む) 三は五だ、戸塚へ行け。

(かくして順々に繰返し次第に進む。第五の侍女、年最も少きが一人衆を離れて賽の目に乗し、正面突当りなる窓際に進み、他と、間隔る。公子。これより前、姿見を見詰めて、賽の目と宿の数を算え淀む。……この時、うかとしたる体ていに書を落す。)

まだ、誰も上らないか。

侍女一 やつと一人天竜川まで参りました。

公子 ああ、まだるっこい。賽を二つ一所に振ろうか。（手にしながら姿見に見入る。侍女等、等しく其方を凝視す。）

侍女五 きやつ。（叫ぶ。隙なし。その姿、窓の外へ裳を引いて颯と消ゆ）ああれえ。

侍女等、口々に、あれ、あれ、鮫が、鮫が、入道鮫が、と立乱れ騒ぎ狂う。

公子 入道鮫が、何、（窓に衝と寄る。）

侍女一 ああ、黒鮫が三百ばかり。

侍女二 取巻いて、群りかかつて。

侍女三 あれ、入道が口に銜えた。

公子 外道、外道、その女を返せ、外道。（叱咤しつつ、窓より出でんとす。）

侍女等 緹り留む。

侍女四 軽々しい、若様。

公子 放せ。あれ見い。外道の口の間から、女の髪が溢れて落ちる。やあ、胸へ、乳へ、

牙が喰入る。ええ、油断した。……骨も筋も断れような。ああ、手を悶える、裳を煽る。

侍女六 いいえ、若様、私たち御殿の女は、身は綿よりも柔かです。

侍女七 蓮の糸を束ねましたようですから、鰐の牙が、脊筋と鳩尾へ噛合いましたも、

薄紙ひとえ一重透きます内は、血にも肉にも障りません。

侍女三 入道も、一類も、色を漁あさるのでございます。生命いのちはしばらく助りましょう。

侍女四 その中うちに、その中に。まあ、お静まり遊ばして。

公子 いや、俺の力は弱いもののためだ。生命いのちに掛けて取返す。——鎧よろいを寄越せ。

侍女二人衝つと出で、引返して、二人して、一領の鎧を捧げ、背後うしろより颯さつと肩に投掛く。

公子、上へ引いて、頸うなじよりつらなりたる兜かぶとを頂く。角つある毒竜すさま、凄かしらじき頭となる。そ

の頭を頂く時に、侍女等、鎧よろいの裾すそを捌さばく。外套がいとうのごとく背より垂れて、紫うろこの鱗こ、金

色んじきの斑点連り輝く。

公子、また袖を取つて肩よりして自ら喉のどに結ぶ、この結びめ、左右一雙の毒竜の爪な

り。迅速に一縮す。立直るや否や、劍つるぎを抜いて、頭上に翳かげし、ハタと窓外にらを睨にらむ。

侍女六人、齊ひとしくその左右に折敷き、手に手にあいくち首あいくちを抜連れて晃きら々と敵に構う。

外道、退ひくな。(凝じつと視みて、劍の刃を下に引く) 虜とりこを離した。受取れ。

侍女一 鎧をめしたばかりで、御威徳を恐れて引きました。

侍女二 長う太く、数すひやく百の鮫さめのかさなつて、蜈蚣むかでのように見えたのが、ああ、ちりぢり

に、ちりぢりに。

侍女三　めだかのように遁にげて行ゆきます。

公子　おお、ちょうど黒潮等が帰つて来た、帰つた。

侍女四　ほんに、おつかい帰りの姉さんが、とりこを抱取つて下すつた。

公子　介抱してやれ。お前たちは出迎え。

侍女三人ずつ、一方は鬨とびのうちへ。一方は廻廊とびらに退場。

公子、真まんなか中に、すつくと立ち、静かに劍つるぎを納めて、右手めでなる白珊瑚しろさんごの椅子いすに凭よる。

騎士五人廻廊まで登場。

騎士一同　（槍やりを伏せて、裾うすくまり、同音に呼ぶ）若様。

公子　おお、帰つたか。

騎士一　もつての外な、今ほどは。

公子　何でもない、私は無事だ、皆御苦労だったな。

騎士一同　はッ。

公子　途中まで出向つたらう、僧都はどうしたか。

騎士一　あとの我ら夥間なかまを率いて、入道鮫を追掛けて参りました。

公子　よい相手だ、戦鬪は観みものであらう。——皆は休むが可いい。

騎士 槍は鞘に納めますまい、このまま御門を堅めまするわ。

公子 さまでにせずとも大事な、休め。

騎士等、礼拝して退場。侍女一、登場。

侍女一 御安心遊ばし、疵を受けましたほどでもございませぬ。ただ、酷く驚きまして。

公子 可愛相に、よく介抱してやれ。

侍女一 二人が附添っております、(廻廊を見込む) ああ、もう御廊下まで。(公子のさしにより、姿見に錦の蔽を掛け、闖に入る。)

美女。先達の女房に、片手、手を曳かれて登場。姿を肅に、深く差俯向き、面影やややつれたれども、さまで悪怯れざる態度、徐に廻廊を進みて、床を上段に昇る。

昇る時も、裾捌き静なり。

侍女三人、燈籠二個ずつ二人、一つを一人、五個を提げて附添い出で、一人々々、廻廊の廂に架け、そのまま引返す。燈籠を侍女等の差置き果つるまでに、女房は、美女をその上段、紅き枝珊瑚の椅子まで導く順にてありたし。女房、謹んで公子に礼して、美女に椅子を教う。

女房 お掛け遊ばしまし。

美女、据置かるる状さまに椅子に掛く。女房はその裳もすそに跪居ついいる。

美女、うつむきたるまましぼし、皆無言。やがて顔を上げて、正しく公子と見向ふ。

瞳を据まえて瞬まばたきせず。——問ま。

公子 よく見えた。(無造作に、座を立つて、卓テエブル子の周圍まわりに近づき、手を取らんと衝つ

腕かいなを伸ばす。美女、崩るるがごとくに椅子をはずれ、床に伏す。)

女房 どうなさいました、貴女あなた、どうなさいました。

美女 (声細く、されども判然) はい、……覚悟しては来ましたけれど、余りと言え、

可恐おそろしゆうございますもの。

女房 (心付く) おお、若様。その鎧よろいをお解き遊ばせ。お驚きなさいますのもごもつとも

でございます。

公子 解いても可いい、(結び目に手を掛け、思慮す)が、解かんでも可よかろう。……最初

に見た目はどこまでも附つきま絡う。(美女に)貴女あなた、おい、貴女、これを恐れては不可い可か、

私わはこれあるがために、強い。これあるがために力があり威がある。今も既にこれに困

つて、めしつかう女の、入道鮫に噛かまれたのを助けたのです。

美女（やや面を上ぐ）お召使が鮫の口に、やつぱり、そんな可恐い処なんでございますか。

公子 はははは、（笑う）貴女、敵のない国が、世界のどこにあるんですか。仇は至る処に満ちている——ただ一人の娘を捧ぐ、……海の幸を賜われ——貴女の親は、既に貴女の仇なのではないか。ただその敵に勝てば可いのだ。私は、この強さ、力、威あるがために勝つ。聞にただ二人ある時でも私はこれを脱ぐまいと思う。私の心は貴女を愛して、私の鎧は、敵から、仇から、世界から貴女を守護する。弱いもののために強いんです。毒竜の鱗は絡い、爪は抱き、角は枕してもいささかも貴女の身は傷けない。ともにこの鎧に包まる内は、貴女は海の女王なんだ。放縦に大胆に、不羈、専横に、心のままにして差支えない。鱗に、爪に、角に、一糸掛けない白身を抱かれ包まれて、渡津海の広さを散歩しても、あえて世に憚る事はない。誰の目にも触れない。人は指をせん。時として見るものは、沖のその影を、真珠の光と見る。指すものは、喜見城の幻景に迷うのです。

女の身として、優しいもの、媚あるもの、従うものに慕われて、それが何の本懐です。私は鱗をもって、角をもって、爪をもって愛するんだ。……鎧は脱ぐまい、と思う。

(從容として椅子に戻る。)

美女 (起直り、会釈す) ……父へ、海の幸をお授け下さいました、津波のお強さ、船を覆して、ここへ、遠い海の中をお連れなすった、お力。道すがらはまたお使者で、金剛石のこの襟飾、飾、宝玉のこの指環、(嬉しげに見ゆ) 貴方の御威徳はよく分りましたのでございます。

公子 津波位、家来どもが些細な事を。さあ、そこへお掛け。

女房、介抱して、美女、椅子に直る。

頸飾なんぞ、珠なんぞ。美女の腰掛けている、それは珊瑚だ。

美女 まあ、父に下さいました枝よりは、幾倍とも。

公子 あれは草です。較ぶればここのは大樹だ。椅子の丈は陸の山よりも高い。そうして
いる貴女の姿は、夕日影の峰に、雪の消残ったようであろう。少しく離れた私の兜の竜頭は、城の天守の棟に飾った黄金の鯨ほどに見えようと思う。

美女 あの、人の目に、それが、貴方？

公子 譬喩です、人間の目には何にも見えん。

美女 ああ、見えはいたしますまい。お恥かしい、人間の小さな心には、ここに、見ます

れば私が裳を曳きます床も、琅玕の一枚石。こうした御殿のある事は、夢にも知らないのでございますもの、情のう存じます。

公子 いや、そんなに謙遜をするには当らん。陸には名山、佳水がある。峻岳、大河がある。

美女 でも、こんな御殿はないのです。

公子 あるのを知らないのです。海底の琅玕の宮殿に、宝蔵の珠玉金銀が、虹に透いて見えるのに、更科の秋の月、錦を染めた木曾の山々は劣りはしない。……峰には、その錦葉を織る竜田姫がおいでなんだ。人間は知らんのか、知っても知らないふりをするのだろう。知らない振をして見ないんだらう。——陸は尊い、景色は得難い。今も、道中双六をして遊ぶのに、五十三次一枚絵さえ手許にはなかつたのだ。絵も貴い。

美女 あんな事をおっしゃって、絵には活きたものは住んでおりませんではありませんか。公子 いや、住居をしている。色彩は皆生きて動く。けれども、人は知らないのだ。人は見ないのだ。見ても見ない振をしているんだから、決して人間の凡てを貴いとは言わない、美しいとは言わない。ただ陸は貴い。けれども、我が海は、この水は、一畝りの波を起して、その陸を浸す事が出来るんだ。ただ貴く、美しいものは亡びない。……中にも貴

女は美しい。だから、陸のひとつら一浦を亡ほろぼして、ここへ迎え取ったのです。亡ほろぼす力のあ
るものが、亡ほろびないものを迎え入れて、且つ愛し且つ守護するのです。貴女は、喜よろこばね
ば不可いけない、嬉うれしがらなければならぬ、悲かなしんではなりません。

女房 貴女、おつしやる通りでございます。途中でも私わたくしが、お喜よろこばしい、おめでたい儀と
申しました。決してお歎なげきなさいます事はありません。

美女 いいえ、歎なげきはいたしません。悲かなしみはいたしません。ただ歎なげきますもの、悲かなしみ
ますものに、私わたしの、この容ようす子を見せてやりたいと思うのです。

女房 人間の目には見えません。

美女 故郷ふるさとの人たちには。

公子 見えるものか。

美女 (やや意気ぐむ) あの、私の親には。

公子 貴女は見えると思うのか。

美女 こうして、活いきておりますもの。

公子 (屹ぎっとしたる音調) 無論、活いきている。しかし、船から沈しづむ時、ここへ来るにどう
いう決心をしたのですか。

美女 それは死ぬ事と思ひました。故郷ふるさとの人も皆そう思つて、分けて親は歎き悲しみました。

公子 貴女の親は悲しむ事は少しもなからう。はじめからそのつもりで、約束の財を得た。しかも満足だと云つた。その代りに娘を波に沈めるのに、少しも歎くことはないではないか。

美女 けれども、父娘おやこの情愛でございます。

公子 勝手な情愛だね。人間の、そんな情愛は私には分らん。(頭かぶりを掉ふる)が、まあ、情愛としておく、それで。

美女 父は涙にくれました。小船が波に放たれます時、渚なぎさの砂に、父の倒たおれ伏ふしました処は、あの、ちようど夕月に紫の枝珊瑚を抱きました処なのです。そして、後の歎あとなげきは、前の喜びにくらばまして、幾十層倍だつたでございましょう。

公子 じゃ、その枝珊瑚を波に返して、約束を戻せば可よかつた。

美女 いいえ、ですが、もう、海の幸も、枝珊瑚も、金銀に代り、家蔵いえくらに代つていたのでございます。

公子 可よし、その金銀を散らし、施し、棄て、蔵くらを毀こぼち、家を焼いて、もとの破やれ衰みの一領、

網一具の漁民となつて、娘の命乞をすれば可かつた。

美女 それでも、約束の女を寄越せと、海坊主のような黒い人が、夜ごと夜ごと天井を覗き、屏風を見越し、壁襖に立つて、責めわたり、催促をなさいます。今更、家蔵に替えましたツて、とそう思つたのでございます。

公子 貴女の父は、もとの貧民になり下るから娘を許して下さい、と、その海坊主に掛合つてみたのですか。みはしなكارう。そして、貴女を船に送出す時、磯に倒れて悲しもうが、新しい白壁、艶ある蓑を、山際の月に照らさして、夥多の奴婢に取巻かせて、近頃呼入れた、若い妾に介抱されていたではないのか。なぜ、それが情愛なんです。

美女 はい。……（恥じて首低る。）

公子 貴女を責めるのではない。よしそれが人間の情愛なれば情愛で可い、私とは何の係わりもないから。ちつとも構わん。が、私の愛する、この宮殿にある貴女が、そんな故郷を思うて、歎いては不可ん。悲しんでは不可んと云うのです。

美女 貴方。（向直る。声に力を帯ぶ）私は始めから、決して歎いてはいないのです。父は悲しみました。浦人は可哀がりました。ですが私は——約束に応じて宝を与え、その約束を責めて女を取る、——それが夢なれば、船に乗つても沈みはしまい。もし事実

として、浪に引入るるものがあれば、それは生あるもの、形あるもの、云うまでもありません、心あり魂あり、声あるものに違いない。その上、威があり力があり、榮と光とあるものに違いないと思ひました。ですから、人はそうして歎いても、私は小船で流されますのを、さまで、慌騒ぎも、泣悲しみも、落着過ぎもしなかつたんです。もしか、船が沈まなければ無事なんです。生命はあるんですもの。覆す手があれば、それは生きている手なんです。その手に縋つて、海の中に活きられると思つたのです。

公子（聞きつつ莞爾とす）やあ、（女房に）……この女は豪いぞ！ はじめから歎いておらん、慰め賺す要はない。私はしおらしい。あわれな花を手活にしてながめようと思つた。違う！ これは楽しく歌う鳥だ、面白い。それも愉快だ。おい、酒を寄越せ。

手を挙ぐ。たちまち闔開けて、三人の侍女、二罈の酒と、白金の皿に一對の玉盞を捧げて出づ。女房盞を取つて、公子と美女の前に置く。侍女退場す。女房酒を両方に注ぐ。

女房 めし上りまし。

美女（辞宜す）私は、ちつとも。

公子（品よく盞を含みながら）貴女、少しも辛うない。

女房 貴女の薄紅うすべになは桃の露、あちらは菊花しずくの雪です。お国では御存じありませんか。

海には最上の飲料のみしろです。お気が清すずしくなります、召あがれ。

美女 あの、桃の露、（見物席の方へ、半ば片袖を蔽おほうて、うつむき飲む）は。（と小ちいき

呼吸いきす）何という涼しい、爽さわやいだ——蘇よみがえ生なつたような気がします。

公子 蘇生よみがえつたのではないでしょう。更に新しい生命いのちを得たんだ。

美女 嬉しい、嬉しい、嬉しい、貴方。私がこうして活いきていますのを、見せてやりとう

存じます。

公子 別に見せる要はありますまい。

美女 でも、人は私が死んだと思っております。

公子 勝手に思わせておいて可いいではないか。

美女 ですけども、ですけども。

公子 その情愛、とかで、貴女の親に見せたいのか。

美女 ええ、父をはじめ、浦のもの、それから皆みんなに知らせなければ残念です。

公子 （卓テエブル子こに胸を凭よせ出いだす）帰りたいか、故郷へ。

美女 いいえ、この宮殿、この宝玉、この指環、この酒、この栄華、私は故郷へなぞ帰り

たくはないのです。

公子 では、何が知らせたいのです。

美女 だって、貴方、人に知られないで活きているのは、活きているのじゃないんですもの。

公子 (色はじめて鬱す) むむ。

美女 (微酔の睷花やかに) 誰も知らない命は、生命ではありません。この宝玉も、この指環も、人が見ないでは、ちつとも価値がないのです。

公子 それは不可ん。(卓子を軽く打って立つ) 貴女は榮耀が見せびらかしたいんだな。そりや不可ん。人は自己、自分で満足をせねばならん。人に価値をつけさせて、それに従うべきものじゃない。(近寄る) 人は自分で活ければ可い、生命を保てば可い。しかも愛するものとともに活ければ、少しも不足はなかうと思う。宝玉とてもその通り、手箱にこれを蔵すれば、宝玉そのものだけの価値を保つ。人に与うる時、十倍の光を放つ。ただ、人に見せびらかす時、その艶は黒くなり、その質は醜くなる。

美女 ええ、ですから……来るお庭にも敷詰めてありました、あの宝玉一つも、この上お許し下さいますなら、きつと慈善に施して参ります。

公子　ここに、用意の宝蔵がある。皆、貴女のものです。施すは可い。が、人知れずでなければ出来ない、貴女の名を顕し、姿を見せては施すことはならないんです。

美女　それでは何にもなりません。何の効もありません。

公子　（色やや嶮し）随分、勝手を云う。が、貴女の美しさに免じて許す。歌う鳥が囀るんだ、雲雀は星を凌ぐ。星は蹴落さない。声が可愛らしいからなんです。（女房に）おい、注げ。

女房酌す。

美女　（怯れたる内端な態度）もうもう、決して、虚飾、栄耀を見せようとは思いません。

あの、ただ活きている事だけを知らせとう存じます。

公子　（冷かに）止したが可からう。

美女　いいえ、唯今も申します通り、故郷へ帰つて、そこに留まります気は露ほどもないのです。ちよつとお許しを受けてまして生命のあります事だけを。

公子、無言にして頭掉る。美女、縋るがごとくす。

あの、お許しは下さいませんか。ちつとの外出もありませんか。

公子　（爽に）獄屋ではない、大自由、大自在な領分だ。歎くもの悲しむものは無論の事、

僅きん少しょうの憂うれいあり、不平あるものさえ一日も一個ひとりたりとも国に置かない。が、貴女には既に心を許して、秘蔵の酒を飲ませた。海の果はて、陸の終おわり、思おもつて行ゆかれない処はない。故郷ふるさとごときはただ一飛ひととび、瞬まばたきをする間まに行ゆかれる。(愍あわれむ)ごとくしみじみと顔を視みる)が、気の毒です。

貴女にその驕おごりと、虚飾みえの心さえなかつたら、一生聞かなくとも済む、また聞かせたくない事だつた。貴女、これ。

(美女顔を上ぐ。その肩に手を掛く)ここに来た、貴女はもう人間ではない。

美女 ええ。(驚く。)

公子 蛇身へびになつた、美しい蛇へびになつたんだ。

美女、瞳みはを睜みはる。

その貴女の身に輝く、宝玉も、指環も、紅べに、紫うろこの鱗うろこの光と、人間の目に輝くのみです。

美女 あれ。(椅子を落つ。侍女の膝にて、袖を見、背を見、手を見つつ、わななき震う。

雪の指尖ゆびさき、思おもわず鬢びんを取とつて衝つと立ちつつ)いいえ、いいえ、いいえ。どこも蛇にはなりません。一い、一枚も鱗はない。

公子 一枚も鱗はない、無論どこも蛇へびにはならない。貴女は美しい女です。けれども、人

間の眼まなこだ。人の見る目だ。故郷に姿を顕あらわす時、貴女の父、貴女の友、貴女の村、浦、貴女の全国の、貴女を見る目は、誰も残らず大蛇と見る。ものを云う声はただ、炎の舌ひらめが閃く。吐く息は煙を渦巻く。悲歎の涙は、硫黄ゆおうを流して草を爛ただらす。長い袖は、腥なまげい風を起して樹を枯らす。悶もたゆる膚はだは鱗ならを鳴してのたうち蜿うねる。ふと、肉身のものの目に、その丈より長い黒髪の、三筋、五筋、筋を透すかして、大蛇の背に黒く引くのを見る、それがなごりと思うが可いい。

美女（髪みだるるまでかぶりを掉ふる）嘘うそです、嘘うそです。人を呪のろって、人を呪のろって、貴方こそ、その毒蛇です。親のために沈んだ身が蛇体になろう筈はずがない。遣やつて下さい。故郷にへ帰して下さい。親の、人の、友だちの目を借りて、尾のない鱗のない私の身が駭ためきたい。遣やつて下さい。故郷にへ帰して下さい。

公子 大自在の国だ。勝手に行くが可いい、そして試すが可よかろう。

美女 どこに、故郷ふるさとの浦は……どこに。

女房 あれあすこに。（廻廊の燈籠を指ゆびさす。）

美女 おお、（身震みふるす）船の沈んだ浦が見える。（翻ひらり然と飛ぶ。……乱くれないる紅、炎のご

とく、トンと床を下りるや、颯さつと廻廊を突切つつきる。途端に、五個の燈籠ひと齊しく消ゆ。廻廊

暗し。美女、その暗中に消ゆ一舞台の上段のみ、やや明るく残る。()

公子 おい、その姿見の蔽を取れ。陸を見よう。

女房 困った御婦人です。しかしお可哀相なものでございます。(立つ。舞台暗くなる。)

——やがて明るくなる時、花やかに侍女皆あり。()

公子。椅子に凭る。——その足許に、美女倒れ伏す——疾く既に歸り来れる趣。髪すべて乱れ、袂裂け帯崩る。

公子 (玉盞を含みつつ悠然として) 故郷はどうでした。……どうした、私が云つた通りろう。貴女の父の少い妾は、貴女その恐しい蛇の姿を見て気絶した。貴女の父は、下男とともに、鉄砲をもってその蛇を狙つたではありませんか。渠等は第一、私を見てさえ蛇体だと思ふ。人間の目はそういうものだ。そんな処に用はあるまい。泣いていては不可ん。

美女悲泣す。

不可ん、おい、泣くのは不可ん。(眉を顰む。)

女房 (背を擦る) 若様は、歎悲むのがお嫌です。御性急でいらつしやいますから、御機嫌に障ると悪い。ここは、楽しむ処、歌う処、舞う処、喜び、遊ぶ処ですよ。

美女 ええ、貴女方は楽しいでしょう、嬉しいでしょう、お舞いなさい、お唄いなさい、私、私は泣死なきじにに死ぬんです。

公子 死ぬまで泣かれて堪たまるものか。あんな故郷くにに何の未練がある。さあ、機嫌を直せ。ここには悲哀のあることを許さんぞ。

美女 お許しなくば、どうなりと。ええ、故郷ふるさとの事も、私の身体からだも、皆みんな、貴方の魔法です。

公子 どこまで疑う。(忿怒ふんぬの形相) お前を蛇体と思うのは、人間の目だと云うに。俺おれの……魔……法。許さんぞ。女、悲しむものは殺す。

美女 ええ、ええ、お殺しなさいまし。活いきられる身体からだではないのです。

公子 (憤然として立つ) 黒潮等は居おらんか。この女を処置しろ。

言下に、床板を跳ね、その穴より黒潮騎士こくちようきし、大錨おおいかりをかついで顕あらわる。騎士二三、続いて飛出づ。美女を引立て、一の騎士が倒さかしまに押立てたる錨いましに縛しまむ。錨の刃越はぎしに、黒髪あぎとの乱るるを搔かいつか掴つかんで、押仰向おしあおむかす。長槍ながやりの刃、鋭くその頤あぎとに臨あむ。

女房 ああ、若様。

公子 止めるのか。

女房 お床が血に汚れはいたしませんか。

公子 美しい女だ。花を撈るも同じ事よ、花片と蕊と、ばらばらに分れるばかりだ。あ

とは手箱に蔵つておこう。——殺せ。（騎士、槍を取直す。）

美女 貴方、こんな悪魚の牙は可厭です。御卑怯な。見ていないで、御自分でお殺しな

さいまし。

（公子、頷ぎ、無言にてつかつかと寄り、猶予わず剣を抜き、颯と目に翳し、衝と引いて斜に構う。面を見合す。）

ああ、貴方。私を斬る、私を殺す、その、顔のお綺麗さ、気高さ、美しさ、目の清しさ、眉の勇ましき。はじめて見ました、位の高さ、品の可さ。もう、故郷も何も忘れませんでした。早く殺して。ああ、嬉しい。（莞爾する。）

公子 解け。

騎士等、美女を助けて、片隅に退く。公子、剣を提げたるまま、

こちらへおいで。（美女、手を曳かる。ともに床に上る。公子剣を軽く取る。）終生を盟おう。手を出せ。（手首を取つて刃を腕に引く、一線の紅血、玉盞に滴る。公子返す切尖に自から腕を引く、紫の血、玉盞に滴る。）飲め、吞もう。

盞さかずきをかわして、仰いで飲む。廻廊の燈籠一斉ともに点り輝く。

あれ見い、血を取かわして飲んだと思うと、お前の故郷くにの、浦の磯いそに、岩に、紫あかと紅の
花が咲いた。それとも、星か。

(一同打見る。)

あれは何だ。

美女 見覚ええました花ですが、私はもう忘れしました。

公子 (書を見つつ) 博士、博士。

博士 (登場) ……お召。

公子 (指ゆびさす) あの花は何ですか。(書を渡さんとす。)

博士 存じております。竜胆りんとうと撫子とこなつでございます。新夫人にいおくさまの、お心が通いまして、

折からの霜に、一際色が冴さえました。若様と奥様の血おもかけの涕なみだでございます。

公子 人間にそれが分るか。

博士 心ないものには知れますまい。詩人、画家が、しかし認めますでございましょう。

公子 お前、私の悪意ある呪詛のろいでないのが知れたらう。

美女 (うなだる) お見棄みすてのう、幾久しく。

一同 —— 万歳を申上げます。 ——

公子 皆、休息をなさい。(一同退場。)

公子、美女と手を携えて一步す。美しき花降る。二歩す、フト立停まる。三歩を動かす時、音楽聞ゆ。

美女 一步ひとあしに花が降り、二歩ふたあしには微妙かおりの薫、いま三あしめに、ひとりでに、楽しい音楽の聞えます。ここは極楽でございますか。

公子 ははは、そんな処と一所たまにされて堪るものか。おい、女の行く極楽ゆに男は居らんど。(鎧よろいの結むすび目を解きかけて、音楽につれて徐おもむろに、やや、ななめに立ちつつ、その竜の爪つめを美女の背にかく。雪の振袖、紫の鱗の端ほのかに仄ほのかに見ゆ) 男の行く極楽に女は居ない。

—— 幕 ——

大正二(一九一三)年十二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海神別荘

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>